

ンディの方であれ、それぞれの能力が伸ばせるソフトウェアがあります。プロップ・ステーションではチャレンジがプロになり、今度は彼らが先生になって教えていきます。そうすると今までコンピュータは無理だろうといわれていた知的障がいや発達障がいの人たちに教えるノウハウを彼ら自身が蓄えていくんです。例えば、足でパソコンを操作する人が、ひらがなしか読めない子にIllustratorの使い方を教え、今この子はバリバリIllustratorを使いこなしています。そういったことが日々起きています。

だけど日本の国は、まだまだそういうことに気付いていないし、障がい者には無理だと思っているし、ICTはそんなにすごい道具なんだということも知られていません。私たちが発信していきますが、原口さんには総務大臣という立場で発信していただきたいですし、できればタイアップしてきちっと世の中に知らしめる活動をやれたらいいなと思っています。

原口 やりましょう。来年度予算の中にICT協働教育予算を入れています。ICT教育という、「電子黒板で何かするんですか?」という人がい

ますが、違います。今ナミねえがおっしゃるように、自分が先生になれるんですよ。○×△を求める教育は、「あなたにダメ」と相手を排除するものでした。学校に私のイスがなかったように。誰かの成功が誰かの失敗になる社会というのは、とても貧しい社会です。情報共有型のICTの協働教育というのはそうではなくて、お互いが先生だし、お互いが知識を積み重ねられるし、お互いが芸術性を高めることができるんです。奪い合うのではなく、分け合うということなのです。足を引っ張り合うのではなく、力を重ね合うということなのです。ICTという道具を使って、皆がお互いの中に深く眠る宝をもっと引き出し合いましょ、ということです。可能性への挑戦の道具はいくらでもあります。



CM字幕の問題に、
早速、総務省としての
改善策を練ります

竹中ナミ
Takenaka Nami
社会福祉法人
プロップ・ステーション
理事長

1948年神戸市生まれ。重症心身障害の長女（現在36歳）を授かったことから、独学で障害児医療・福祉・教育を学ぶ。

1991年、車の横のグループとしてプロップ・ステーションを発足。1998年厚生大臣認可の社会福祉法人格を取得し理事長に。ICTを駆使してチャレンジ（障害を持つ人の可能性に着目した新しい言語）の自立と社会参画、とりわけ就労の促進を支援する活動を続けている。「チャレンジ

を納税者にできる日本」をスローガンに、1995年より毎年チャレンジ・ジャパン・フォーラム（JCF）国際会議を主宰。

財務省財政制度等審議会委員、総務省情報通信審議会委員、内閣府中央障害者施策推進協議会委員、国土交通省「自律移動支援プロジェクト」スーパーバイザーなどを歴任。著書「プロップ・ステーションの挑戦」（筑摩書房）、「ラッキーウーマン〜マイナスこそプラスの種」（飛鳥新社）

社会のバリアを取るための「合理的配慮を怠る」のも差別

ナミねえ 地上デジタル放送もその道具の一つです。ところがテレビ放送の中でCMは放送時間の約2割を占めていますが、そこに字幕は付いていません。十数年前に私はビル・ゲイツさんからお手紙をいただいたことがあるのですが、そのお手紙にはすでに「字幕放送はすべての人に有用であり、当たり前のことです」といったことが書かれていました。日本では字幕放送は福祉政策の一環として、「聞こえない人に字幕を与える」というような姿勢で行われています。CMはユーザーを増やすために放送するのですが、字幕が付いていないためにそのCMが何を売ろうとしているのかかわらない人がいるんです。聴覚障がいの友人が「白い犬が何か吠えているCMをよく見られるけど、あれ何?」と聞かれました。CMで一番伝えたいコアな所が伝わっていないんです。もったいないと思いませんか。地デジになるとボタン一つで字幕を出せるわけです。CMであらうが、ニュースであらうが、ドラマであらうが、ボタン一つで字幕が出るようになればいいね、という素朴な考えで情報通信審議会などで発言してきました。

原口 地デジになればさまざまなオプションが拡がっています。チャレンジに必要な情報伝達を本当の意味で保障できると考えています。ホワイトスペースでいろいろなこともできるし、情報を圧縮できますから、アナログだとできなかったことが、地デジでは双方向でいくだけでもできます。

ナミねえ しかも、そういう技術に関して日本は最高レベルにあります。ところがCMに字幕を